

平成 23 年度東京都写真美術館コレクション展

# こどもの情景

## Photographs of Children

- 「戦争と子どもたち」 2011年5月14日(土)～7月10日(日)  
「子どもを撮る技術」 2011年7月16日(土)～9月19日(月・祝)  
「原風景を求めて」 2011年9月24日(土)～12月4日(日)

会場 東京都写真美術館 3階展示室

主催＝東京都 東京都写真美術館／協賛＝凸版印刷株式会社／協力＝講談社



田村 茂 <敗戦の素顔> 1945年頃(「戦争と子どもたち」展より)

### 展覧会概要

東京都写真美術館のコレクション展は、年間を通じたテーマを設定し、収蔵作品約2万6000点から選りすぐられた名品の数々で構成されています。写真美術館ならではの専門性と企画力、充実した出品ラインナップ、そして1年間を通じてお楽しみいただける親しみやすさを持ち合わせた、当館を代表する展覧会です。平成17年度の開館10周年記念展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」を皮切りに、「昭和—写真の1945-1989」(平成19年度)、「ヴィジョンズ オブ アメリカ」(平成20年度)、「旅」(平成21年度)、「ポートレート」(平成22年度)と、回を重ねて開催して参りました。

平成23年度は「こどもの情景」をテーマに、19世紀の写真黎明期から現代まで、子どもをテーマとした国内外の写真家たちの作品をたどり、そこに写しだされた時代の姿やこどものイメージの変遷を、写真の技法や作家の個性とともにご紹介します。

## 展示構成

本展は3つの時代とテーマに焦点をあて、5月～12月にかけて3回に分けて開催いたします。

### 「こどもの情景－戦争と子どもたち」

#### Photographs of Children - Children and War

開催期間：2011年5月14日（土）～7月10日（日）

ここで紹介する作品は、「戦争」と「子ども」をキーワードに選び出された写真です。「戦争」といっても、第二次世界大戦やベトナム戦争などの、戦場に生きる子どもたちだけを取り上げるものではありません。非戦場でありながらも、戦時下や戦後まで、時代の影とともに成長する「子ども」の姿が一貫して登場します。

厳しい時代のなかで画面に存在する「子ども」の姿は、「戦争」という奥深い世界へ入るためのエントランスのような役割を果たしているようにも見えます。それは、「子ども」特有のエネルギーが、見る者を引き寄せるからなのかもしれません。

戦争をテーマにした写真には、写真成立の大前提である「撮影者」「被写体」「時間」「場所」という条件に加え、歴史的な情報や写真表現のあり方など、様々な要素が何層にも重なります。そうした複雑な情報を頭で考えるよりも先に、「子ども」が放つ力強さは、見る者を無条件に作品の中へと導きます。生きる象徴としての「子ども」という被写体の特徴が、「戦争」の中で際立って感じられる内容です。



長倉 洋海 《生まれたばかりの赤ん坊を取り囲む  
難民の子供たち》 1982年

出品作家（予定）：石井幸之助、臼井薫、大石芳野、岡村昭彦、影山光洋、菊池俊吉、木村伊兵衛、ロバート・キャパ、熊谷元一、島田謹介、W.ユージン・スミス、田中一郎、田沼武能、田村茂、土田ヒロミ、東松照明、土門拳、長倉洋海、長野重一、中村梧郎、中村立行、濱谷 浩、林 忠彦、樋口忠男、藤本四八、細江英公、カール・マイダンス、牧田仁、宮武 東洋、山端 庸介、吉崎一人、ドロシヤ・ラング ほか



上段左) 東松 照明 《姉妹》 1955年 上段中) 熊谷元一《コッペパンをかじる》「小学一年生」より 1953年 上段右) 東松 照明 《水上小学校(1)》「水上小学校」より 1956年 下段左) 長野 重一 《東ベルリン・砲台の跡でロケット遊びをする子供》「ベルリン・東と西」より 1960年 下段中) 石井 幸之助 《戦災孤児九州君》 1946年 下段右) 影山 光洋 《小麦の収穫祝、家族の肖像》 1946年

#### ■担当学芸員によるフロアレクチャー

「こどもの情景－戦争と子どもたち」展担当学芸員による展示解説を行います。

開催日時：会期中の第2・4金曜日 16:00～

## 「こどもの情景－こどもを撮る技術」

Photographs of Children - the art of photographing children (仮称)

開催期間：2011年7月16日(土)～9月19日(月・祝)



制作者不詳 題不詳(家族像)  
1840-1859年

生き生きとした、こどもの動きの一瞬を捉えたい。親ならだれもが思うことでしょう。しかし、写真黎明期には、まだ動きの一瞬を捉える技術はありませんでした。ガラスを指示体とする写真方式が主流とされ始めた1850年代、感光材料の感度はISO感度0.1-1.0程度で、最低ISO感度100のデジタルカメラが主流の今とは大きな違いです。でもその時代から、こどもを撮影する努力はされ続けていました。こどもの手足を押さえ、動きを止めようとする大人の姿が、この時代の写真には数多く残っています。

1871年になるとリチャード・マドックスがゼラチン乾板を発明、1878年に応用発展されて「スワン乾板」が発売されます。これ以前に主流であったコロディオン湿板方式に比べて、感度が飛躍的に向上し、じっとしていないこどもの撮影を可能にしました。携帯性にも優れたため、写真を撮ること自体が徐々に一般化していきました。

演出写真や芸術写真にも、モデルによる匿名的なこどもの姿が繰り返し登場します。撮ることが一般的でなかった19世紀、一握りの撮る人々は、様々な角度、視点、技術でこどものイメージを発信し続けました。

出品作家(予定)：ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット、フェリーチェ・ベアト、下岡 蓮杖、小島 柳蛙、江崎 礼二、小川 一眞、黒川 翠山、堺 時雄、河野 龍太郎、小川 月舟、ユージン、フランク、大久保 好六 ほか



左) スティルフリート&アンデルセン 題不詳(子守する娘たち) 明治時代初期 鶏卵紙に手彩色 中) エジャートン、ハロルド・ユージン 《縄跳びするマリー・ルー》 1940年 ダイ・トランスファ・プリント 右) ジュリア・マーガレット・キャメロン 《マーガレット》1860-70年頃 アルビューメン・プリント

## 「こどもの情景－原風景を求めて」

Photographs of Children - the child within us

開催期間：2011年9月24日(土)～12月4日(日)

私たちは、「こども」を撮ったさまざまな写真から、何を見出すのでしょうか。

戦後から高度成長期のこどもの明るさ、元気さは、未来への希望を象徴しているようです。路上で出会った見知らぬこどもたちの無垢な姿は、現実社会と明暗の対比をなしています。こどもの後ろ姿、顔が見えない匿名的な描写や、こどもの視点を連想させるイメージが、見るものの想像力に働きかけ、誰もが抱いている懐かしい記憶をくすぐることもあります。そして、こどもが直接登場しないこども不在の光景のなかには、時として作家の幼年期の体験が込められていることもあります。

このように、「こどもの情景」は、人間存在の「原点」にある、世界との調和や幸福感のようなものを垣間見せてくれます。心に残る「こどもの情景」は、言い換えれば大人にとっての「原風景」であり、そこからの隔たりをたえず意識させ、ノスタルジーや喪失感といった心情を思い起こさせるのです。ここでは、こどもをめぐる写真表現をたどることで、現代人の心の原風景を読み解いていきます。



川内倫子 untitled 「うたたね」より 2001年

出品作家（予定）：植田 正治、杵島 隆、木村 伊兵衛、土門 拳、石元 泰博、東松 照明、田沼 武能、森山 大道、荒木 経惟、ウィリアム・クライン、エリオット・アーウィット、ダイアン・アーバス、奈良原 一高、牛腸 茂雄、藤原 新也、オノデラユキ、川内倫子、やなぎみわ、朝海陽子 ほか



左) ユージン・スミス 《楽園への歩み》 1946年 中上) 森山 大道 《少年》 1979年 中中) 川田 喜久治 「ロス・カプリチオス」より 1972年 中下) オノデラユキ 《古着のポートレイト no.7》 1994年 右上) 植田 正治 《風景の光景》 1970-1980年 右下) エリオット・アーウィット 《コロラド》 1955年※

## 関連書籍の発行

『こどもの情景』（講談社刊）

本展の開催にあわせて、「戦争と子どもたち」、「こどもを撮る技術」、「原風景を求めて」の各展より代表的な出品作品を掲載した公式ガイドブック写真集です。各展の担当学芸員によるテキストも掲載しています。

## 開催概要

会 期 2011年5月14日（土）～2011年12月4日（日）  
会 場 東京都写真美術館 3階展示室  
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内  
ホームページ [www.syabi.com](http://www.syabi.com) 電話 03-3280-0099  
主催関係 主催＝東京都 東京都写真美術館／協賛＝凸版印刷株式会社／協力＝講談社  
開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00 入館は閉館の30分前）※最新の開館情報はお問い合わせください  
休館日 毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）  
観覧料 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65歳以上 250（200）  
※（ ）は20名以上団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料  
交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分  
当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

## お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033  
展覧会担当 「戦争と子どもたち」 鈴木 佳子 [y.suzuki@syabi.com](mailto:y.suzuki@syabi.com)  
「こどもを撮る技術」 三井 圭司 [k.mitsui@syabi.com](mailto:k.mitsui@syabi.com)  
「原風景を求めて」 石田 哲朗 [t.ishida@syabi.com](mailto:t.ishida@syabi.com)  
監修：金子 隆一 [r.kaneko@syabi.com](mailto:r.kaneko@syabi.com) 副担当：藤村 里美 [s.fujimura@syabi.com](mailto:s.fujimura@syabi.com)  
広報担当 久代 明子 [a.kushiro@syabi.com](mailto:a.kushiro@syabi.com) 前原 貴子 [t.maehara@syabi.com](mailto:t.maehara@syabi.com)

プレス掲載用に図版データ（※印を除く）をご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください